教育のしろ

第165号
令和4年2月24日
能代市教育委員会
学校教育課
創刊
昭和42年10月10日
題字　元能代市教育長
鎌田　宏

巻頭言

アンビシャス

能代二中学校長
佐藤　俊之

「ボーイズ　ビー　アンビシャス」（クラーク博士）。アンビシャスを「大志」と捉えるか「野心」と捉えるかで、日本人としてはニュアンスが違ってきます。

私は入学式で、新入生に「夢や目標に向かって努力する生徒であってほしい」と必ず話します。夢は叶わないかもしれない。でも、結果ではなく、努力するプロセスに生きる楽しさや充実感があると思うからです。

ロックシンガーの浜田麻里さんは自身の曲「ジャンピング　ハイ」で、「せっかく生まれてきたのに、なんとなく生きてるなんてもったいないと思いませんか」と決めセリフを言います。作家の林真理子さんは著書「野心のすすめ」で、「今のままじゃダメ。もっと成功したい」と思い、健全な野心をもつことが人生をより良いものにする（野心は車の前輪、努力は後輪。野心と努力、両方のバランスが大事）、と言います。

クラーク博士の言葉には続きがあります。「お金のためでなく、私欲のためでもなく、名声という空虚な志のためでもなく、人はいかにあるべきか、その道を全うするために大志を抱け」

私には難しいことを言ったり実行したりすることはできませんが、少年（少女）も、そうでない人も、アンビシャスをもつことが大切なのかな、と思っています。

スクールニュース

生きる力の涵養を目指して

能代東中学校
教頭　安部　晃幸

本校は令和二年度より、県教育庁保健体育課から地域連携安全・安心推進事業のモデル校の指定を受け、校種及び地域住民並びに専門機関等と連携した学校安全に関する取組を実践してきた。

「助けられる人から助ける人へ」をスローガンに掲げ、取り組んできた今年度の活動の中でも、特筆すべきは、全国の五つの中学校をオンラインでつなぎ実施した、『全国中学校「防災小説」交流会』への参加である。

本校は二年生だけの参加となったが、各校の代表が自分を主人公として、まだ起きていない未来の地震を、大切な家族や友人、地域を想いながら綴った「防災小説」は、災害を自分事として捉えさせ、本校の防災教育を受動的な学びから能動的な学びへと変化させるきっかけとなった。

このような取組を継続しながら、社会をよりよく生きる力の涵養を目指していきたい。

輝きの一場面

地域学校協働活動　5年家庭科
地域の方との温かい触れ合い
令和3年5月28日　淳城南小学校

これが私の指導法
～知的財産の継承～

向能代小学校
教諭　三田　陽子

久しぶりに一年生の担任となった。雨の朝も凍てつく冬の朝も、健気に登校してくる子どもたちが愛おしく、「よく来たね。」と、頭を撫でずにはいられない。学校に来るって、実はすごいことなのだと、このご時世、改めて感じている。

子どもたちにとって、学校が楽しい場となるよう、そして、『自立・自律』できる人間になるよう、日々努めてきたつもりである。今日は、そのささやかな実践を紹介したい。

一つ目は、やはり授業改善である。時間に追われ、教材研究がおろそかになってしまうことも正直あるが、なるべく板書型指導案を書き、授業の流れをイメージするようにしている。

二つ目は、個々の最適化を意識した指導である。以前は、学級としてこうでなければならないと、画一的な型にはめ込んでいた。育った環境もレディネスも様々な子どもたちである。表面化された行動だけで判断するのではなく、内面的な気持ちにも目を向け、どんな指導がその子にとって最適なのか考えて向かうように努めている。

三つ目は、『笑顔と歌声』である。屈託なく大きな声で笑うことができるよう、一日一笑を心がけている。また、朝の会の中の「今月の歌」は、子どもと一緒に全力で大きな声で歌うようにしている。歌うことは、心を開放することだそうだ。子どもたちにとって、学級が自分をさらけ出せる居心地のよい場所だということを実感させたい。何の遠慮もなく大きな声で歌える日々が、早く戻ってくるといいのだが…。

ささやかな実践ですが、このような振り返りの機会を与えてくださり、ありがとうございました。

我が校の実践

第四小学校
教諭　貝森　智美

『「比較・検討」を意識した、学び合い高め合う授業づくり』

本校は、今年度より文科省の委託を受けてカリキュラム・マネジメントに関する調査研究に取り組んでいる。学習に関して、本校で育てたい資質・能力を「他者との協働により、学びを深化する力」とし、「比較・検討」に係る指導を要としている。

研究主題「進んで学び、伝え合い、考えを深める子どもの育成」のもと、**くらべる**をキーワードに教師と児童が共に「学び合い（展開部）」に取り組んできた。以下、成果と課題を紹介する。

①くらべる板書カードの効果
→児童の変容

児童が「さあ比べるぞ。」「発表するぞ。」「まとめにつなげるぞ。」という気持ちをもつようになった。そして、「比べることで、よりよい考え方や問題解決ができるようになった。」と比べる学び合いのよさを自覚できた。

②くらべるは導入部から終末部の全てに有効

学習課題をつくる際、前時や既習と比べる。振り返りで友達の考えや既習事項と比べる。児童が比べる意識をずっともち続けていた。

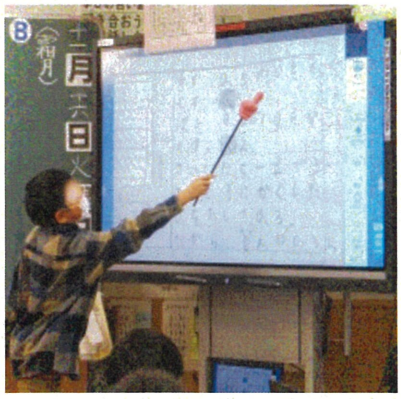
③教師の意識の変容

「見方・考え方」を身に付け、ねらいを達成するために比べて話し合うためには、どんな発問がよいか、どんな学習活動がよいかをより意識するようになった。

④くらべるための課題

比べて話すためには、「聞く・話す力」を高めなければならない。学び合いに全員が参加できるように学習活動に工夫が必要である。

来年度は、算数科で高まった児童のくらべる意識を、他教科へも広げていく見通しである。各教科の授業で課題を解決し、満足げな表情をしている児童の姿が目に浮かぶ。



輝きの一場面

第６９回東雲祭「叫べ～青く駆けろ～」の閉会式の一コマ
令和３年９月５日　東雲中学校

編集後記

コロナ禍での制限ある生活も２年が過ぎようとしています。そんな中でも各校では工夫をしながら教育水準を落とすことなく、むしろ向上させた取組が行われていることが、お寄せいただいた文章や写真からうかがうことができます。まだまだゴールが見えない状況ですが、学びを止めることなく、今後も引き続きよろしくお願いします。

今年度も「教育のしろ」に各校より玉稿をお寄せいただき、ありがとうございました。（H）